

明治四十五年四月

史學
研究會
講演集
第四冊

東京
合資
會社
富山房發行

史學研究會講演集第四冊



目次

保物語考

文學博士 上田

田

敏

一頁

印度史研究資料に就いて

文學博士 松本文三郎 九三

元祿時代の京都小説家

文學士 藤井乙男 一五四

儒佛道三教葛藤史研究資料

文學博士 高瀬武次郎 一九二

鎌倉時代の布教と當時の交通

文學博士 原勝郎 二九九

西魏の四面像に就いて……………

……………文學士濱田耕作……………二七七

雜錄

因幡國網代の正平古鐘……………湯本文彦……………二九六

本會記事……………三〇五

挿圖

口繪 西魏四面像正面……………對頁

第一圖 同上右側面及左側面……………二七六

第二圖 同上背面……………二七六

第三圖 同上刻銘……………二七六

第四圖 因幡國網代村梵鐘銘文……………三九六

西魏四面像正

京都帝國大學文科大學藏

第一圖

西魏四面像右側面及左側面

京都帝國大學文科大學藏

朝

左

側

右

第二圖
西魏四面像背面

京都帝國大學文科大學藏

圖 名

圖 左

第 三 圖

西 魏 四 面 像 銘 銘

吉 州 帝 國 人 學 文 科 大 學 藏

圖 背

西魏の四面像に就いて

濱田耕作

京都帝國大學文科大學の所藏に西魏の四面像あり、清國陝西省西安附近より將來せられたるものに係ると云ふ、其の形體甚だ大ならずと雖も、造像銘文の完美せるあり、蓋し獲易からざる遺物なるのみならず、四面像なるものゝ本質を研究することは、藝術史上最も興味ある一問題なりと思惟するを以て、今此の四面像に關して余輩の考察せる一斑を述ぶる所あらんとす。

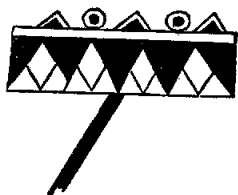
四面像とは其の文字の示すが如く、一個の材料の四面に佛像を彫刻したるものにして、立像若しくは高浮彫の一群なり、されど各面の彫像は各別の題目を有し、必しも相互の間に藝術上密接なる意義の聯絡あるを要せず、唯だ其の單一挾有の材料と、之によりて表現せらるゝ一個の建築的意義あるを以て足れりとす可し、此の種の造像は我が國に於いては未だ製作せられたるを聞かずと雖も、支那に於いては其の遺品少からざる可く、我國に將來せられたるものも必ずしも我が京都文科大學の藏品に限らざる可し、さて之を四面像と稱するは、北周保定四年聖母寺の像碑にも、「工造四面像一區」とあり、南面釋迦、北面彌勒、東面觀音、西面無量壽像を刻せるものあるによりても、古く此の語ありしを知る可し。

文科大學所藏の四面像は高さ一尺一寸、潤き底部に於いて六寸五分、奥行四寸一分あり、石質は片麻岩なり、小川博士の鑑定に據る全體は梯形の立方體にして上部狭く下底廣く、奥行短く、佛像を其の中央四面に、立像に近き高浮彫を以て刻出せり、而して頂部には一個の天蓋を懸吊して四面を覆ひ、臺座には正面に仁王博山爐等を薄肉彫にて現はし、他の三面には銘文を刻む、今順次各部に就きて略說せん、

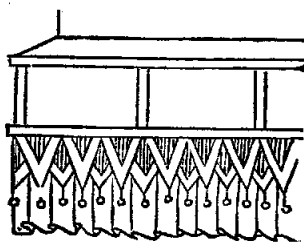
(一)天蓋 四方の内正面尤も精密なる手法を行ひ、裝飾亦複雑なり、上帶の上には寶相華に似たる花紋あり、其の下には希臘に於て多く見る所の卵舌(egg & tongue)模様の一列あり、次は魚鱗形にして下方に寶珠を附著せる模様あり、次に幕帳の縦に折り重なりて、其の下に皺襞の連れるものを現はし、最後に幕

西魏の四面像に就いて

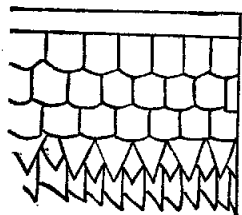
雲岡石窟寺
第二窟(シヤパンヌ氏)



同如来殿(伊東博士)

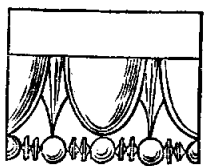


同第六窟(伊東博士)

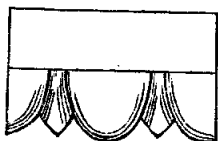


天蓋意匠
比較圖

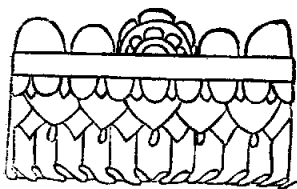
希臘



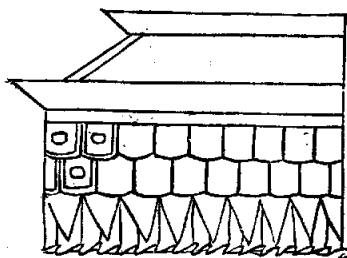
西魏四面像



西魏四面像



法隆寺(金堂)



卵舌模様

を垂れたり、而して正面の華紋は他の三面に比して複雑なるのみならず、卵舌模様の下に瓔珞を附加せるを見る、此の魚鱗襞状幕の天蓋は、元と手持の幡蓋より出で、支那山西省大同府雲岡の石窟寺の如來殿等にあるものと全く様式を一にし、又た我が法隆寺金堂及び橘夫人厨子の天蓋とも酷似し、飛鳥朝の美術の淵源の北魏時代に存することを確證す可き一資料たり、天蓋の四方には方形に近き圓柱ありて之を支承せしも、今は缺損して、纔に柱脚を存するのみ、柱脚は印度式逆蓮花の裝飾を有し、當代建築の一端を窺はしむるものあり。

(二) 正・面・釋・迦・佛・淨・土 を刻出す、中央に如來の座像あり、説法の印を爲し、須彌壇上に跌座す、壇は蓮花中より出で、如來の衣紋垂れて其の前面を覆ひ、衣襞の皺線相重累せる状、我が飛鳥時

代の佛像及び他の北魏時代の佛像と酷肖せり、左右には右手を擧げたる脇侍の二菩薩侍立し、中尊と脇侍との間には圓頂の二比丘を現はす、全體の構圖我が法隆寺金堂の壁畫及び善光寺如來押出佛等と同一軌に出づるが如し、諸佛の中僧形の二人は其の面相最も明亮に残存せるが、或は顔をしかめ、或は口を上部に曲げ、前顱部の著しく凸出せるものあり、殊の相好を現はし手法巧妙を極めたり、而して中尊及び二脇侍は共に舟形の光背を負へるが、中央の大光背には朱色の賦彩今なほ遺存せり、此等の例によりて察するに、當時の石像は其の初め鮮麗なる彩色を施せるものなること、かの健馱羅彫刻に於けるが如く、又た希臘彫刻に於ける著彩(Polychrome)と同趣味に出でしを知る可し、思ふに大理石の如き石質の美麗なるもの

にさへ、彩色を加ふること古代美術家の常とすれば、斯の如き石質の愛す可きものなき片麻岩等に賦彩を試むるは、蓋し自然の勢なりと謂ふ可し、脇侍菩薩の前面に二獅あり、顔面恠偉にして鬣を卷垂し、姿勢亦た頗る雄逸なり、要するに此の釋迦淨土は正面の彫像なるを以て、作者は特に精巧なる手法を行

り、複雑なる意匠を施せるを認む可きなり。
(三)背・面・定・光・佛・三・尊　定光は燃作とも譯し、燃燈佛とも云ふ、梵名を提和渴羅(Dīpankara)と云ひ、過去久遠の昔出現して、釋尊に記別を授けし師佛なりと云ふ、中央に說法の相をなし圓光を負ひて立つ、衣紋の襞線は我が飛鳥時代の末期頃のものと一致し、稍、進歩して自由となれり、左右二脇士は圓顱にして、左手衣端を捉り、圓光を背にせり、面貌は右脇侍のみ完存す。

(四) 左方彌勒菩薩　この像は四面中最も完全に遺存せるが、頭に寶冠を戴き、胸に瓔珞を垂れ、椅子に座し、説法の相を爲し、逆蓮座の上に足を著く、背部には圓光なし、頭部稍大に過ぐる感なきに非ざるも、全體の權衡必しも悪からず、顔面は幅廣く眉秀で、口は上方に彎曲し耳長し、寶冠の飾亦長く肩上に垂る、其の趣致宛として推古時代の佛像の如し。

(五) 右方普賢菩薩　面部及び右手を缺損せるも、象背に駕し合掌せる像なり、象の形態頗る巧妙にして、普賢の體容亦優美、衣紋は曲折自在にして拈握の所なく、後世普賢菩薩の畫像の本づく所夙く當代に在るを思はしむ。

(六) 正面臺座浮彫　中央に博山香爐形を置き、其の上方左右に日月(?)を現はせる二球あり、二菩薩之を捉らんとするものゝ

如し、又其の左右には仁王を刻す、右方は圓形、左方は寶珠形の背光を負ひ、變化の趣を示す、共に鬚髯を著け足を踏み手を擧げ忿怒の狀を爲す、其の形橘夫人厨子扉畫の仁王に相似たり、北齊天保五年の造像にも同じく臺座に博山爐等を刻せるものあり、石卷五卷蓋し同趣向に出づ。

(七)銘文 左方彌勒の臺座より起りて背面を廻つて普賢の臺座に達す、一行五字或は四字、方眼の罫線中に刻す、正楷にして頗る雄勁、隋碑の趣あり、唐歐陽詢の書風に似たる所あり、文に曰く、

大統十七年

五日己未佛

歲次辛未三

弟子衛大將

月乙己朔

軍行猗氏縣

十

以上右方

事安次縣

七世父母

開國男艾

過去見在

(以上背面)

殷敬造定

眷屬一切舍

光釋迦彌

生恒與善俱

勒普賢四

咸昇大寂

軀カ上カ爲カ

妻彭白妃

皇帝陛下

息男仙伯

(以上右左)

今ま此の銘文に就きて少しく説く所あらんに、全體の文體は、當時に最も普通なるものにして、年代に於ても、文體に於ても大統十六年九月一日の岐法起の造像記等之に相類するものあり、金石粹編卷三十二大統十七年は西魏孝文帝の時にして我が欽明天皇十二年(西曆五五一)に當る、朔字の次なる一字不明なるも、干

支より推して、十字なること固より明なり、猗氏縣は山西省にあり、唐の河東郡蒲州に隸し、漢の舊縣なり、かの魯の窮士猗頓の牛羊を養ひて大富を致せりと傳へらるゝ地なり、西魏恭帝二年改めて桑泉縣となし、後周明帝に至り舊名に復す、安次縣は直隸省にあり河北郡幽州に隸し、亦漢の舊縣なり、縣東永濟渠に枕し、漢武の時燕より奪つて渤海郡に屬せしめたるものなり、開國男は魏書官氏志に「開國男第五品」とあり、艾殷は即ち安次縣開國男に封ぜられしなり、艾殷は其の傳詳ならず、萬姓統譜に艾姓は「齊大夫艾孔之後」とあり、魏書官氏志に「去斥氏後改爲艾氏」と見ゆ、恐らくは此等の家門に屬する人ならむ、其の妻子は銘文によりて知らるゝ所なるが、記銘の順序は必しも此の例に據らず、北魏延昌二年張相隊造像記金石粹編卷二十七の如きは、息を

先にし妻を後にせるものあるを見る。

さて定光釋迦彌勒普賢の四佛を一石に合刻するは如何なる理由に由れるか、思ふに定光は過去、釋迦は現在、彌勒は未來の佛として、三世に亘れる意味なる可く、普賢を之れに配するの理由は未だ之を詳にせず、而して定光佛は南北朝の造像に特に其の例多く、北魏永平三年比丘尼法衍造像記にも「敬心造定光石像一區并二菩薩」云々とあり、其の他枚舉に違あらず、然れども此の以後の時代には定光佛を見ると頗る稀なるのみならず、日本に於いては南北朝の佛教の影響を受けたる推古時代に在りても、之を認むること無し、皇帝陛下の上二字は北齊姚氏造像記武平三年北魏曹續生造像記大統五年同田僧敬造象記等によりても、上爲の二字なることを推察す可し、通常次に下は云

云と對するを例とするも、本銘には此の文字なく、而かも僅に
殘存せる字劃に依りて上爲と讀むの外無し、見在は固より現
在と同じく、含生は群生と同じく、其の用例永平四年安定王造
像記等に見えたり、大寂は涅槃と同義なるが、恒與善俱の四字
は其の意明かならず、但だ大統十六年岐法起造像記金石粹編卷三十二に
家口大小無病、長壽常與善俱一時成とあり、又北魏李和之造像
記金石粹編卷二十九に願生々世々恒與善會とあるを以て、善俱と善會と
其の同義なることを知るを得るのみ。

以上余輩は我が文科大學所藏の四面像の各部に就きて略
説する所ありしが、翻つて斯の如き四面像なる一種の造像は、
如何にして發生せしものなるか、其の源く所は何處にあるか

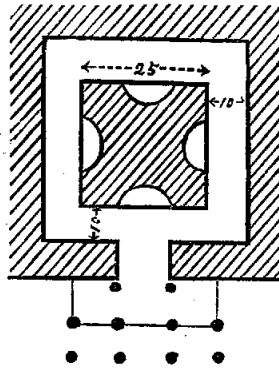
に就きて一個の臆説を立せんと欲す、已に述べたるが如く此の四面像は其の上部を覆ふに一個の天蓋を以てし、天蓋は又た四方を承くるに柱を以てせるより見るも、既に佛像と建築との結合を示せるや明なり、而して余輩は此の建築的意義を以て、南北朝殊に北魏の頃最も盛に行はれたる石窟寺(Rock cut or cave temple)に其の發源するを思ふものなり、請ふ少しく其の理由を述べん。

支那に於ける石窟寺は或は其の源を西域印度に發するならんも、支那佛教美術の源流たる健馱羅地方には此の風無く、却つて中部以南の印度バージヤ(Balija)ナシツク(Nassick)カリ(Karli)アチャンタ(Ajunta)エレフンタ(Elphanta)等に之を存するのみ、又た支那の石窟寺に有名なるものを擧ぐれば、洛陽伊

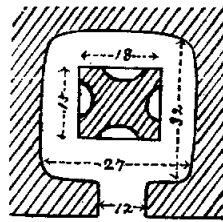
闕龍門、敦煌、莫高窟、四川千佛崖、遼西義州萬佛堂等ありと雖も、就中北魏の都なりし山西省大同府雲岡の石窟寺を以て、支那本土に於ける權輿とす可きか、大清一統志等には明元帝神瑞元年より孝明帝正光末年(西紀四一四—五二四)の間(西曆第五世紀中葉)に成るものとなせど、魏書釋老志によれば、文成帝の初年(西曆第五世紀中葉)曇曜白帝、於京城西武州塞、鑿山石壁、開窟五所、鑄建佛像各一、高者七十尺、次六十尺、彫飾奇偉、冠於一世」とあり、其の創建の年代を明にす可く、又同書に宣武帝景明元年(西紀五百年)大長秋卿白整に詔して、大京靈巖寺即ち雲岡の石窟に準じて、高祖文昭皇太后の爲に、雒南伊闕山に石窟二所を作らしむとあるを以て見れば、金石文字記の作者の言の如く、雲岡の石窟寺が「其作備也」と云ふを得可きなり。

さて此の雲岡の石窟寺の構造を窺ふに、其中如來殿は、伊東博士の報告によれば國華第九十七號及建築雜誌第九十六號、大佛殿に接して西に如來殿あり、…其窟は正方形にして各邊四十五尺あり、周圍に十

雲岡石窟寺如來殿



同 第二窟



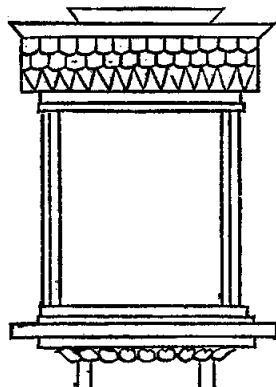
尺の通路を取り、中心方二十五尺の柱を残し、之を分つて二層とし、每層其の四面に佛の立像を刻出せり、上層に於いては其の四隅に九重の小塔を作り、柱に代へ、以て天蓋

を支承せり、天蓋は我が法隆寺金堂内のものと全く同式にして、直ちに天井に附著せりとあり、又た其の第三窟は「形如來殿に似たり、中央に方柱ありて直に天井に達し、柱の四面に各龕

を作り、佛像を容るゝこと如來殿の如し」と見ゆ、余輩は洛陽龍門に於いて、賓陽洞、老君洞其他多數の石窟に此の種の構造のものを認めざりしも、敦煌の石窟寺に此の類のものあること、ペリオ氏の寫眞 (The Illustration 紙上) によりて之を察することを得、而して此の雲岡如來殿の如き石窟の中央方柱を天井と地盤とより切り離して、之を縮小すれば即ち上部は天蓋を有し四面に佛像を刻せること、恰も我が四面像と同一なるものを得可けん、余輩は茲に於いて四面像は中央に方柱ある石窟寺の構造を模して造られたる一個の造像なりと云ふを憚らざるなり。

余輩が四面像と聯關して直ちに想起するは法隆寺金堂の橘夫人厨子なり、此の厨子は古今目錄抄に「光明皇后母橘夫人

所造也」とあり、上部に大なる天蓋を頂き下に臺座あり、中央に佛像を安置せるが、天蓋は正しく此の四面像と同じく北魏式にして、其の大なる天蓋を戴く所より、なほ四方に扉を設け、悉く之を開放す可く造られたる點は、此の四面像と其の意義を



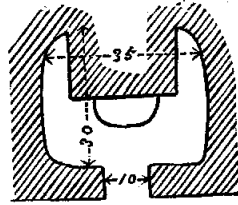
橋夫入厨子上部

同ふし、同じく中央に方柱を有する石窟寺より發生せる系統に入る可きものに外ならず、而して此の厨子の天蓋は厨子全體に比して、稍大に過ぎ、權衡の宜しからざる點よりして、伊東博士

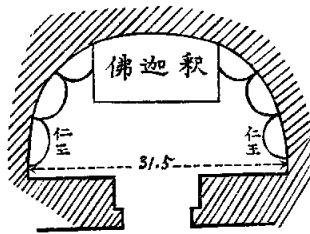
は曾て鳥佛師の佛像上にありしものを取り來りしに非ずやと疑はれたるが、法隆寺建築論關野博士は其の工作上よりして始より此厨子に附着せしものなることを論ぜらたり、國華第百六十四號余

輩は已に此厨子を以て四面像と同系統のものなりとする以上は、固より關野博士に従つて、此天蓋を以て同時に當初より作られしものなりと爲さざるを得ざるなり、又高野山金剛峯寺、同普門院、嚴島神社に傳ふる枕本尊の如きは、同じく石窟寺の構造より出でたる形式とするも、こは中央に方柱なき、雲岡第四窟、龍門齊拔堂及び賓陽洞の如き龕佛を模して作られたるものなりとす可きか、而して此の石窟寺の系統以外に自由建築を模して造られたる厨子亦早く奈良朝(唐代)以前に存するものあり、即ち法隆寺金堂の玉蟲厨子の一類これに屬す。

雲岡第四窟



龍門齊拔堂



寺、同普門院、嚴島神社に傳ふる枕本尊の如きは、同じく石窟寺の構造より出でたる形式とするも、こは中央に方柱なき、雲岡第四窟、龍門齊拔堂及び賓陽洞の如き龕佛を模して作られたるものなりとす可きか、而して

て此の石窟寺の系統以外に自由建築を模して造られたる厨子亦早く奈良朝(唐代)以前に存するものあり、即ち法隆寺金堂の玉蟲厨子の一類これに屬す。

要之、此の四面像は健馱羅建築を模したるロリヤン・タンガイ等發見の石廚子 (Stone Shrine) と同じく、石窟寺の構造より發生したるものなれば、これを亦石廚子と稱するも何等の不可あるを見ず、而かも斯くの如き石質に高浮彫を施し、之に彩色を加ふるが如きは、遠く印度健馱羅彫刻の精神と相應ずるものと言ふ可く、其の佛像天蓋の様式等我が推古時代のそれに酷肖し、北魏の佛像としては稍、進歩せる様式に屬す、想ふに元魏は孝文帝に至りて都を平城より洛陽に移し、胡服胡語を禁じ、銳意支那在來の文物を攝容したるを以て、雲岡石佛寺を以て代表せらるゝ魏朝初期の藝術と、洛陽龍門の石窟寺を以て代表せらるゝ後期の藝術とを比較するに、後者は西域式著くし減退し漢式の増大せるもの多きを見る可く、手法の進歩亦一

層を加へたるや言を俟たず、而して此の四面像は固より元魏後期の美術に屬するものなり、此の像の製作せられたる西魏大統十七年は恰も魏が東西に分争して、將に後周に亡ぼされんとする前數年に過ぎざるに、北朝藝術が此の兵馬倥偬の間に際して、何等大なる影響を受けずして、正に高潮に達せんとしつゝあるを示すは頗る興味ある現象に非ずや、然れども石窟寺の建造は北魏以後漸く盛ならず、以前より竝行し來れる構造的自由建築の寺院が時代の趣味に合致して盛行するに至りては、石窟寺の構造より發生せる四面像の如きも、自ら製作せらるゝこと少なく、廚子に於ても橘夫人廚子よりも玉蟲廚子の系統の喜ばるるに至りしは敢て恠しむに足らざるなり。

(明治四十三年六月廿六日講演)